

「大造じいさんとガン」における「語り」と「視点」

藤森裕治

はじめに

椋鳩十「大造じいさんとガン」は、小学校国語科（五年生）の物語教材として全社の教科書に掲載されている。この作品は、物語の成立に関するやや長い解説からはじまっている。冒頭部の解説によると、シシ狩りにさそわれた「わたし」は、罫炉裏の火にあたりながら、「大造じいさん」とよばれる老狩人からガン狩りの話をきいた。それを翻作してできたのが「大造じいさんとガン」である。

このような書き出しをもつ物語は児童文学に少なくない。例えば「ごんぎつね」の原作者は村の茂平じいという老人であり、「少年の日の思い出」は大人になった「僕」が、友人である語り手に告白した話であることが前置きされている。

小論は、こうした作品成立に関する叙述をふまえた「語り」の在り方について注目するものである。周知のように、物語の成立に作者以外の語り手を設定した作品は、「語り手」を作者から自立させる効果が指摘されているが、「大造じいさんとガン」の「語り」はどのような特徴と効果をもっているだろうか。

この問題を考えるにあたり、小論では本作品における「視点」を手がかりにとりくんでみることにする。

1. 本作品の視点に関する分類とその内容

「大造じいさんとガン」における視点の種類を概観すると、おおむね次のように分類することができる。

① 登場人物の心理・動作を離れた視点から、物語の内容や事柄に説明を加えるもの。

この視点から記された文は、作品の前半に集中する。すなわち、冒頭部の全文と第1節の前半にみられる次の三例である。

- ・ 残雪というのは、一羽のガンに付けられた名前です。
 - ・ 左右のつばさに一か所ずつ……そうよばれていました。
 - ・ それは、いつもガンのえをあさる辺り一面に……結びつけ
- ておくことでした。

これらはいずれも、物語の関連情報として読み手にとどけるべき内容を記しているのだが、作品がおおきく展開する第2・3節にはあらわれない。

第4節では、

・ある晴れた春の朝でした。

を可能性として挙げることができる。ただし、この記述を①の視点とした場合、他の箇所における時候の記述は①に含まれないのか、という疑問が生じる。これに関する詳しい分析は後述するが、他の箇所にあらわれる時候や風景の描写にはいずれも「大造じいさん」の視点による表現が添えられており、じいさんの目にうつった情景であることが読みとれる。したがって、第4節の文も①の視点と言いつつ切ることができない側面をもっている。

② 話者が「大造じいさん」と重なっているもの。

本作品の中心的な出来事は、主としてこの視点によつて語られてゆく。作品の展開は「大造じいさん」と残雪との知恵比べを主軸としているが、その内容はほとんど「大造じいさん」の心理を中心にしたものとなつてゐる。第2節後半にみられるような次の表現でも、話者が重なる対象は「大造じいさん」である。

・「様子の変わった所には、近づかぬがよいぞ。」かれ（残雪）の本能は、そう感じたらしいのです。（括弧内引用者）

この文が「……そう感じたのです。」とあれば、当然、話者は残雪に重なつてゐることになる。しかし、「ここでは「らしい」

と表現されており、小屋の中から残雪の飛翔を観察する「大造じいさん」の推測であることが暗示される。したがつて、その後にある「ぐつと、急角度に方向を変えたと……西側のはしに着陸しました。」という描写は「大造じいさん」が地上からみた光景であることがわかる。これと同様に残雪の行動を「大造じいさん」が推測したとみられる表現は、他に五箇所みとめられる。

「大造じいさん」の心理に直接かかわる描写ではないが、物語の展開における時間や風景の描写も、大部分は「大造じいさん」に重なる視点から描かれている。例えば、

・秋の日は、美しくかがやいていました。

・あかつきの光が、小屋の中にすがすがしく流れこんできました。

した。

・今年もまた、ぼつぼつ、例のぬま地にガンの来る季節になりました。

・東の空が真つ赤に燃えて、朝が来ました。（傍線引用者）
などの諸表現も、傍線部をみると「大造じいさん」の心理への話者の重なりがうかがわれる。四例目の「真つ赤に燃えて」などは①の視点と解釈することも不可能ではないが、直前の

「さあ、いよいよ戦闘開始だ。」

という「大造じいさん」のこぼれをふまえるなら、彼の心象を象徴した朝焼けの光景ととらえる方が豊かな読みとならう。そ

の意味で、前述の視点①における第4節の文は「大造じいさん」の心情に重なるものとみるべきかもしれない。

視点②がクライマックスをむかえると、話者は「大造じいさん」そのものになる。例えば、第3節における

「ハヤブサだ。」

「あつ。」

といった会話文には「大造じいさんは……」といった主語がなく、ハヤブサの突然の来襲におどろく「大造じいさん」の心象がそのまま語られている。

このような表現は、前例の他に

・ぬま地にやってくるガンのすがたが、あなたの空に黒く点々と見えだしました。先頭に来るのが、残雪にちがいありません。

といった描写にもみいだすことができる。こころみにこの叙述を

・大造じいさんが小屋の中で待ちかまえていると、ぬま地にやってくるガンのすがたが、あなたの空に黒く点々と見えだしました。じいさんは、先頭に来るのが、残雪にちがいないと思いました。

と変えてみると、読み手の視点がいかに異なるか理解できる。

後者の文章では、読み手は狭い小屋の中にもぐりこむ「大造じ

いさん」とガンの群れとを交互に想起することになるが、前者は小屋の小さな窓から、大空のあなたを一心に見つめる読み手となるのである。

こうした「大造じいさん」に重なる視点の文体的な特徴をみると、主語の省略が効果的に使われていることがわかる。すなわち、提題表現としての「大造じいさんは……」が省略されることによつて、語り手は「大造じいさん」の視点そのものに重なっているのである。

③ 「大造じいさん」によりそいながら語られてゆくもの。

「大造じいさん」の行動を、そのそばに立つ視点から語つてゆくものであるが、そのほとんどは視点②と密接にかかわっている。例えば、

・じいさんは、一晩じゅうかかつて、たくさんのウナギつりばりをしかけておきました。今度は、なんだかうまくいきそうな気がしてなりませんでした。

という部分を見ると、話者の視点は前の文で「大造じいさん」によりそい、後の文で重なることがわかる。この関連は第一に、

「大造じいさん」の行動

↓その行動に関連する「大造じいさん」の心理

という物語の流れを構成するが、同時に後文の提題部である「大

造じいさんは……」を前文にうけもたせ、

提題部十よりその視点による叙述

↓ (前文の提題部) + かきなりの視点による叙述

という機能を有している。その際、前述のように提題部の省略は読み手の視点を一層「大造じいさん」に重なり合わせる働きをもち、結果として視点③が視点②の文体を補充しているのである。このような関連をもつた表現は全体で十二箇所のにぼる。

④ 話者が残雪によりそいながら語られてゆくもの。

残雪は、「大造じいさん」と対決するキャラクターとして極めて重要な位置にあるが、このガンによりそつた視点は決して多くない。可能性のあるものもふくめて列挙してみると、次の通りである。

- ・ 今年も、残雪は、ガンの群れを率いて、ぬま地にやつてきました。
- ・ 残雪は、このぬま地に集まるガンの頭領らしい……寄せつけませんでした。
- ・ そのよく年も、残雪は、大群を率いてやつてきました。
- ・ 残雪は、いつものように群れの先頭に立つて……真一文字に横切つてやつてきました。
- ・ やがて、えさ場に下りると、グワアグワアというやかましい声で鳴き始めました。

いきなり、敵にぶつかつていきました。そして……なぐりつけました。

・ 残雪は、大造じいさんのおりの中で、元のようになりまして。

・ 残雪は、あの長い首をかたむけて、……一直線に空へ飛び上がりました。

右に描かれる対象の主体が残雪であることはまちがいない。ただし、これらが純粹に話者の視点を残雪によりそさせたものかどうかはより詳細な検討を要する。例えば、残雪という名が

初めて登場する次の文をみてみよう。

・ 今年も、残雪は、ガンの群れを率いて、ぬま地にやつてきました。(傍線引用者)

この文における「も」、「は」という二つの助詞に注意したい。残雪とは何であり、それが今年より前から「ぬま地」に渡つてきていることを知っている者でなければ、このような文をいきなり理解することはできない。それでは、物語の冒頭から残雪をこのようにとらえることのできる主体はだれか。いうまでもなく「大造じいさん」である。すなわち、読み手は、残雪という名の意味表象をしらされぬまま、いきなり「大造じいさん」の視点にひきこまれることになる。

⑤ 話者が残雪と重なつていけるもの。

話者が残雪に重なつて描いているととらえることのできるものは、三箇所にしぼられる。

・残雪は、油断なく地上を見下ろしながら……いつものえさ場に、昨日までなかつた小さな小屋をみとめました。

・残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間の姿があるだけでした。

・残雪は、むねの辺りをくれないにそめて、……しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、……じいさんを正面からにらみつけました。

話者の視点が残雪に重なつた描写としてあげられるのはこの三箇所であるが、小論は、視点④もふくめてこれら残雪によりその視点に異論をとなえる。その徴証は視点②、④において既にふれているが、これらの描写を、小論では「残雪によりそ大造じいさん」という視点からとらえるべきと考える。次節はこの詳細について考察する。

2. 「残雪の視点」への疑問

前節の視点④と⑤は、残雪によりそい、あるいは重なつたとみられる視点を検討したものが、そこにあげられた表現はいずれも、

話者↓残雪

という視点の方向性のみでは片づけられない要素を持つてい

る。例えば視点⑤に挙げた

・残雪は、油断なく地上を見下ろしながら……いつものえさ場に、昨日までなかつた小さな小屋をみとめました。

・残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間の姿があるだけでした。

・残雪は、むねの辺りをくれないにそめて、……しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、……じいさんを正面からにらみつけました。(傍線引用者)

という描写をみてみよう。これらの叙述のみを切り取つてみるかぎり、傍線部はいかにも残雪の視点そのものであり、その内面を擬人化して描いたものとうけとめられる。

しかし、これらの文章の直前・直後には、いずれの時にも残雪をつぶさに見つめる「大造じいさん」が描かれていることに注意しなければならぬ。例えば前二箇所の描写の直前で、「大造じいさん」は猟銃を「ぐつと」にぎりしめて残雪をねらつてゐる。このとき、読み手は彼の視点によりそいながら、彼と同じように銃口を残雪に向けて右の描写にさしかかる。はるかかたを飛翔する残雪の姿は、望遠レンズで焦点化したかのごとく克明に観察されるのである。いわば、話者はあくまでも「大造じいさん」の視点によりそい重なりながら、なおかつ「大造じいさん」の目をおして残雪にせまつてゆくのである。

また、第三に挙げた描写は、ハヤブサと闘つて墜落した残雪

のところ、「大造じいさん」がかけよる場面である。「おそろしい敵」の接近は、直前まで残雪をねらっていた「大造じいさん」の実感でもある。

こうした分析から、小論では残雪側の視点ついて次のような構造を提起する。

話者↓「大造じいさん」

↓ 残雪

すなわち、視点⑤にあげた三つの描写は、話者が直接残雪の視点に転換したというよりも、「大造じいさん」の眼前に繰り広げられた残雪の生きる姿とみるべきだと思ふのである。かかるガンの英雄の知恵と勇姿をみせつけられた「大造じいさん」は「ううん」とうなり、やがては「じゅうを下ろしてしま」う。そしてついには「ただの鳥に対してのような気」がしなくなつてゆく。残雪の描写が「大造じいさん」をそのような状況へとみちびくためには、前掲の叙述はいずれも「大造じいさん」が自らの目に焼き付けたものとして読む姿勢がもとめられるのである。

このような観点から残雪によりそう視点の描写をみると、ことごとく「大造じいさん」の視点を經ずして成立しえないことに気付く。次に示す各描写の傍線部は、括弧に記した理由づけをみると、すべて「大造じいさん」の視点になる。

・今年も、残雪は、ガンの群れを率いて、ぬま地にやつてきました。(既述)

・残雪は、このぬま地に集まるガンの頭領らしいなかなかり
こうなやつで……寄せつけませんでした。

・「大造じいさん」の経験知として、残雪に対する評価がな
されている。

・そのよく年も、残雪は、大群を率いてやつてきました。

・(ガンの群れの規模に対する関心は「大造じいさん」の視点
である。)

・残雪は、いつものように群れの先頭に立つて……真一文字
に横切つてやつてきました。

・(飛翔する情景を地上の「大造じいさん」の位置から描いて
いる。)

・やがて、えさ場に下りると、グワアグワアというやかまし
い声で鳴き始めました。

・(直後に続く描写はこの声に感応する「大造じいさん」の姿
であり、ガンの鳴き声のやかましさは、遠方の「大造じい
さん」の耳にとどいた設定になつている。)

・いきなり、敵にぶつかつていきました。そして……なぐり
つけました。

・(視点⑤の描写につづくものであり、「大造じいさん」の目
撃した情景である。)

・残雪は、「大造じいさん」のおりの中で、……元のように
なりました。

（「大造じいさん」からみた残雪の回復状況であり、これをふまえて残雪は放される。）

・残雪は、あの長い首をかたむけて、……一直線に空へ飛び上がりました。

（飛翔のいきおいは残雪の野生を衰えさせまいとした「大造じいさん」の意志に裏付けられている。また、この場面は「大造じいさん」の視点から遠ざかる情景である。）

このように、「大造じいさん」の心理や行動との結合関係（一貫性）が切断された状況で残雪独自の心理・行動として描かれる場面は、まったくみられないのである。連綿と「ごん」の視点から語り続けてきた物語が6の場面にきて突然「兵十」に転換したときに生じる対比的な内面描写は、本作品においてはみとめられない。むしろ、ガンの英雄の真実の姿は人智を超えたところにあつて、いたずらにのぞくことを許さないかのようにある。

それではこのような視点論を呈することによって作品の語りの特徴はどのように理解されるであろうか。次節ではこの問題について、「大造じいさん」の語りの在り方と登場者の関係認識をめぐつて追究してみたい。

3. 「大造じいさんとガン」の語りにおける特徴と効果

前節の分析にしたがうなら、「大造じいさんとガン」の視点

は次のように説明される。

この作品の視点は、物語部分のほぼ全編にわたつて「大造じいさん」の視点から描かれている。残雪にクロウズ・アップした描写も「大造じいさん」の視点を介したものであり、ガンの英雄としての知恵や勇姿は、すべて「大造じいさん」の目を通して語られる。

すなわち、残雪は「大造じいさん」にさまざまな感慨をいだかせるガンの英雄ではあるが、あくまでもそれは「大造じいさん」のなかで構築された姿に限定される。このことは、本作品の語りが「狩猟伝承」という設定でつらぬかれていることを意味する。作品冒頭部の解説に示されたように、

狩人である「大造じいさん」の炉辺話をきいた話者（彼もまた狩人のはしくれである）が、語りの視点を「大造じいさん」に重ね合わせながら炉辺で再話した物語

という「語り」の構造が一貫しているのである。このとき、残雪という擬人化されたガンの英雄は、あくまでも狩りの獲物であるという状況認識が生じてくる。この状況認識は、多くの児童文学にあるような、動物の甘い人間化を許さない。ましてや「兵十」に接近しようとした「ごん」のような擬人的自立を認めていない。

それではなぜ「大造じいさん」は獲物を英雄としてみつめ、あまつさえ手負いの残雪を保護しているのか。

それは残雪が彼の獵師としての情熱をわきたたせる、またとない獲物だったからである。その具体的な事情は、残雪が毎年ガンの大群を率いて飛来することによる。残雪は「大造じいさん」の究極的な獲物でありガンの英雄的存在ではあるが、彼にとつては残雪が率いてくるガンの大群により獲物としての魅力を感じているのである。そのことをうかがわせる描写は枚挙にいとまがないが、例えば

・じいさんは、……ひとつ、これをおとりに使つて、残雪の仲間をとらえてやろうと、考えていたのです。(傍線引用者)

といった表現をみればあきらからである。

獲物である以上、そこに人間的なきずなをもとめる読みは成立しえない。もし話者が「大造じいさん」の視点とは独自に残雪によりそつてゆくと、ガンの英雄は必要以上に擬人化され、読み手に歪んだ感情移入をもたらししてしまう。例えば「残雪がねらわれるのはかわいそう」という感傷によつて、獵師と獲物の対決という緊張関係を崩してしまう。これは、ある意味で獵師の存在理由をも危うくする。生け捕りにしたガンをとてなづけ、さながら空の「友釣り」をねらおうとした「大造じいさん」のもくろみが失敗したとき、野生の勘を失つたみじめなガンが対比的に描き出されるのはその一表象とみてよい。

したがつて、「大造じいさん」が春の朝に残雪をおりから放

す場面も、仲良しになつた狩人と獲物とがこころのきずなをむすびつつ別れてゆくシーンなどと解したら台無しになつてしまふ。残雪は、おりのふたがひらくやいなや、一直線に北の空へ飛んで行く。それこそ一心不乱の全速度である。いうまでもなく獵銃の射程圏から一刻も早く脱するためである。この描写と対比して興味深いのが、例の生け捕つたガンのありさまである。

・じいさんが小屋に入ると、一羽のガンが、羽根をばたつかせながら、じいさんに飛び付いてきました。

みじめな家畜化された状況というほかない。この鳥が「大造じいさん」と残雪との真剣勝負に水を差した事情も故なしではあるまい。

「大造じいさんとガン」における語りの特徴をこのように理解すると、「大造じいさん」と残雪との別れの場面はどのように理解されるだろうか。

小論では、この場面を次のように読む。

残雪は、おりを飛び立つて一直線に北の空へ向かつている。「大造じいさん」は、これを目で追いながら呼びかけている。この構図は不変である。その際、「おうい、……」はその声が残雪に届きうる距離での呼び声である。それはやがて、「なあ、おい」という近接する相手への呼びかけになる。このとき、残雪はこれまで「大造じいさん」と戦つてきた距離に到達したのである。その距離にいたつて、

「大造じいさん」にはかつて見慣れてきた残雪の姿（つまり黒い点ほどの姿）が確認されたのである。これが猟師と獲物との本来対峙すべき距離として、なつかしく「大造じいさん」にみつめられた。実際の視認距離は遠く隔たっているが、獲物である残雪への思いはまさに至近距離にある。

この物語が「大造じいさん」の視点をとおして残雪によりその姿を克明にとらえつつつけてきた過程は、まさにこの「なあ、おい」の部分に結晶されているとはいえないか。どうしようもなく隔たっているがゆえにつよくひかれる存在への憧憬は、その憧憬の念をして両者の間隙を美しく接近させる。そのような真実をどこかに感じさせてくれる。

折しもらんまんときいたスモモの花びらが散り、季節は美しい春である。この対極の晩秋には、再び猟師と獲物との戦いがある。野生に生きるもののきびしさと美しさとを知り尽くした老狩人の叙事詩として、最後の呼びかけはひととき印象深い。

おわりに

最後に、この物語の後日談はどう想像できるか述べておきたい。筆者は、この後、大造じいさんが残雪の姿をみることは二度となかったと読む。その予兆は、スモモの花の「らんまん」という描写にある。「らんまん」とは、すでに満開を過ぎて爛

熟期に入った状態を意味する。大造じいさんと残雪とのたたかいはあのハヤブサの来襲が頂点であり、手負いの残雪が大造じいさんの家で越冬した数か月は、この狩猟伝承の後日談なのである。

春の空に残雪を見送った後、物語の舞台は、再び薪のはぜる山家の囲炉裏端にもどる。そこには残雪との格闘からすでに三十年を経た文字通りの「大造じいさん」がいる。かれはおそらく、自らの狩猟伝承をこのように結んだに違いない。

あれが、残雪をみた最後になったのだよー！。

文献

阿部真人一九八四『椋鳩十文学の研究』、大日本図書

井関義久一九八四『国語教育の記号論』、明治図書

関口安義一九八〇『文学教育の課題創造』、教育出版

鶴田清司一九九七『大造じいさんとガンの解釈と分析』、明

治図書

(ふじもり ゆうじ 信州大学教育学部)